

留学生のための物語日本史

第 2 話 卑弥呼

「千与（ちよ）、千与、大丈夫？」

お母さんの呼ぶ声が聞こえました。しかし、意識はあるのに、身体は全く動きませんでした。いや身体だけではなく、口も全く動かさず、声も出ませんでした。

その日は、いつも通り、お母さんたちと一緒に村の裏山に木の実をとりに来ていました。絶好の山登り日和で、暖かく雲一つない天気でした。千与は、山の中の秘密の場所を知っていました。その秘密の場所には、木の実がたくさんあり、またかわいい動物も集まる場所でしたが、なぜか大人は全くその場所には入らなかったのです。

「お母さんにもっとたくさん木の実をとってきてあげるね」

千与はそう言うと、秘密の場所に行って木の実をとっていました。そんなとき、急に天から光の帯が降りてきて、千与に当たったのです。青天の霹靂（せいてんのへきれき）¹とはまさにこのことです。全く雲一つない青空から稲光のような光が轟音とともに千与に当たったのです。心配して駆けつけた母や、一緒に来ていた女性たちは千与を囲むように見っていました。

千与は、全く動きませんでした。しかし、息はしていました。光が当たったのに、全く傷一つなくその場に寝ていたのです。

「この場所は」

「山の神の住処（すみか）じゃ」

一緒に来ていた物知りのお婆さんはそう言いました。

「いつまでもここには、山の神様に怒られる。みんなで村まで運び出すのじゃ」

¹ 青天の霹靂…突然起こった驚くような出来事のたとえ。

翌朝、千与は神の社で目が覚めました。みんなが宮殿に連れてきてくれたのでしょう。

「…千与か……」

どこからともなく声が聞こえます。

「はい」

「いつも私の住処に来た動物たちと遊んでくれてありがとう。今まで動物たちと遊び私の住処を掃除してくれたお礼に、これから千与にいいことを教えてあげよう。この後、私の住処のもう一つ向こうの山が火を噴く。その山の神が怒っているからだ。私の住処より向こう側に行かないように。村の人にもそう伝えておくれ」

「はい…いつも住処で遊んでしまっでごめんなさい」

「怒っていないよ。これからもたまに遊びに来なさい。またいいことを教えてあげよう」

千与は、自分のいた神の社の扉をあけ放つと、村の人にそのことを教えました。村の人で千与の言葉を信じたものは、その日の狩りを止めて村にとどまりました。しかし、千与の家族と仲が悪い人々は、向こうの山まで行ってしまいました。はたして、その日の夕方、急に向こうの山が噴火し、山が大きく崩れてしまいました。

「神様…私、怖いよ」

「千与や。千与が教えなければもっとたくさんの方が死んでいた。そうならないように千与は、怖がらないで、もっと多くの人を救いなさい」

「はい」

その後、千与は「姫巫女（ひめみこ）」と呼ばれるようになり、その予言は、ほとんどすべて当たるとして多くの方が聞きに来ました。姫巫女は、隣村やその向こうの国の人々にも喜んで神様の言葉を伝えました。

中には、姫巫女の予言を嫌がる人もいました。しかし、そのような人の行動も神様は全て教えてくれました。姫巫女は、「隣村の人々がもうじき攻めてきます」と言って多くの方が姫巫女を守るようにしてきたのです。

「これが『サ』²というものですか」

神様が、姫巫女に米を渡しました。

「千与よ…これを河原に撒いて、水と太陽をたくさんあげると良い。今までの穀物よりも良い収穫になる」

「ありがとうございます」

ある日、神様の言う通りに久しぶりに神の住処に行き、動物たちと遊んでいると、ウサギが草で包んだ米を持ってきたのです。姫巫女は、ウサギと少し遊ぶと、神様の報告の通りに米を育てはじめました。翌日から、村の人々は、狩猟するものと米を育てるものとに分かれて皆で働きました。

姫巫女のいる国は、稲作と狩猟で非常に豊かになっていきました。「山の神と人の国」として多くの人が集まってくる国になりました。しかし、人が多くなれば姫巫女はそこでまた大きな悩みを抱えるようになりました。

「神様…人が多くなってしまいました。食べるものが足りません。どうしたらよいでしょうか」

「千与よ…海を渡り大陸の真ん中に『魏（ぎ）』³という大きな国がある。その国は千与の国よりも多くの人を抱え、戦争もおこない、そして、多くの食料を作り出している。その国に行ってどうしたらよいか見ておいで。きつとうまくゆく」

「神様…どうやったら『魏』の国の人はあってくれますか」

「千与よ…『魏』の国の人は、今戦争をしている。兵士を少し貸してあげなさい。それが最もよいであろう」

「わかりました」

姫巫女は、すぐに隣の国に行ける兵士と、そして稲作の技術者である難升米（なしめ）を呼

² サ…古い日本の言葉で、稲の神様のことをいう。

³ 魏…中国の古い国名。三国志などの時代に出てくる。

び寄せ、神様のお告げとして魏の国に向かわせました。

その模様は中国の歴史書である「魏志倭人伝（ぎしわじんてん）」に書いてあります。

「景初二年（238年）六月、倭の女王は大夫の難升米（なしめ）たちを帯方郡（たいほうぐん）に派遣して、天子に朝貢（ちょうこう）したいと求めた。太守の劉夏（りゅうか）は使いを派遣して都（洛陽（らくよう））まで送らせた。（中略）難升米・牛利（ぐり）に託す。国に帰ったならば、記録して受取り、汝の国中の人々に示して、わが国家が汝の国を哀れんでいることを知らしめよ。そのために丁重（ていちょう）に汝に良いものを与えるのである」

このようにして、難升米は収穫量が多くなるような技術を大陸から持ち帰ってきたのです。なお、この時に「山の神と人の国」は、魏の国では「邪馬台国（やまたいこく）」と訳され、また「姫巫女」は「卑弥呼（ひみこ）」と書かれることになったのです。当時、日本には、文字はまだ伝わっていなかったため、この「魏志倭人伝」の記述が、そのまま現在でもつかわれています。

このようにして、「山の神と人の国」は徐々に発展してゆきました。姫巫女は、今まで以上に神の住処に行き、また国の中心にある神の社で、神様の声を聴き、それを人々に伝えたのです。

しかし、そのような姫巫女をあまり快く思っていなかった人がいました。狗奴国（くぬこく）の男王卑弥弓呼（ひみくこ）という人です。自分の国の人々も次々に「山の神と人の国」に行ってしまう、どんどんと領土が少なくなってしまう。それも、姫巫女という人がそれを治めているといいます。

「考えてみる。女が男の俺に勝てるはずがない。それにもかかわらず、どうして俺は姫巫女に勝てないのだ」

卑弥弓呼は、自分の屋敷に家臣たちを集めて酒を飲みながら、苦々（にがにが）しげにそう

言いました。

「恐れながら申し上げます」

狗奴国軍の将軍が言いました。

「それは、我々が行く場所、邪馬台国に行くまでに、必ず敵の軍隊が待ち伏せしているのです。こちらの軍の動きが全部姫巫女にはわかっているかのようで、まったく勝てません」

「どうして我々の軍の動きがわかってしまうのだ」

「恐れながら」

狗奴国の大臣が声をあげます。

「邪馬台国から戻った我々の用間（ようかん）⁴ から話を聞きますと、どうも、姫巫女に山の神が事前に我々の動きを教えているようで、我々の動きは神々によってばれてしまっているのです」

「そうか…神か」

卑弥弓呼は、酒を一気に飲み干すと、にやりと笑って言いました。

「神を殺せ。神の住処を壊してしまえ」

数日後、狗奴国の用間は、邪馬台国にいました。そんなことは全く知らない姫巫女は、いつものように、山の神の住処に向かいます。沿道には多くの人が姫巫女を見送っています。その中に狗奴国のスパイも入っていたのです。

「あそこが神の住処か」

姫巫女がいなくなった後、狗奴国のスパイは、山の中の神の住処を壊しました。そこにある木々をすべて薙（な）ぎ払い、火をつけ、そこにいる動物を殺し、そして、その土地に穴を掘って汚いものを埋めたのです。

「千与…千与」

「神様」

⁴ 用間…スパイのこと。

「もうおわりだ…私の力がなくなってしまった」

「どうして」

「さようなら……千与」

慌てて姫巫女は神の住処に行きました。

「きゃー」

姫巫女は、神の住処があまりにもひどい状態になっているのを見て、そのまま倒れてしまったのです。

日本の神々は怒り、それから二年間、太陽を隠してしまいました。姫巫女は、神の住処が壊されたことでショックを受け、病気になりました。そのうえ、神様の怒りを受けて、亡くなってしまいました。

「私が…私が神様を護れなかった。ごめんなさい」

姫巫女は、最期にそのように言うと、静かに息を引き取りました。

姫巫女と神様のいない「山の神と人の国」は弱かったのです。姫巫女の死を知ると、狗奴国の卑弥弓呼はすぐに攻め込みました。しかし、神様を汚したのは卑弥弓呼です。神様はすぐに稲妻を落として狗奴国の卑弥弓呼を殺してしまい、また悪いことをした軍をすべて滅ぼしてしまいました。

その後、国がたくさん出てきましたが、戦争ばかりしてまったく平和にはなりませんでした。邪馬台国の人々は、戦争を止めさせ、姫巫女の姪の「壺与（いよ）」という名の女性を、姫巫女の代わりにして国を治めたのです。でも国の人々は、姫巫女の時代が良かったと、いつまでも思い出し、山の神の住処はきれいにして神社を建てたのです。

第3話 日本武尊

「小碓命（こうすのみこと）はいるかな」

景行天皇（けいこうてんのう）¹は、息子の小碓命を呼び出しました。景行天皇は現在の九州福岡県、当時は筑紫国といわれていた飯の宮殿に来ていました。景行天皇の息子である小碓命は、飛鳥の都からわざわざ呼ばれたのです。

「小碓、元気か。しばらく見ないうちに大きくなったな」

「はい、陛下のおかげをもちまして、健やかに過ごしております」

本当の親子ではあっても景行天皇と、皇太子でもない小碓命は、宮殿でも、また社会的にも身分が全く違います。そのため、小碓命は、父であっても天皇に対するときは敬語で話さなければなりません。

「一つ、小碓に聞きたいことがある」

「はい、何なりと」

「実は、われら朝廷が命じてもその命令に服さない者がおる。小碓は、朕（ちん）²の命令に服さない者をどうするか」

「それは忌忌（ゆゆ）しき問題でございます。この小碓がきっと成敗して御覧に入れましよう」

「よし、それでこそ我が息子小碓である」

景行天皇は手をたたいて喜びました。

「陛下に申しあげます。陛下の命令に服さない者とは一体誰でしょうか」

「今戦っておる、熊襲建（くまとける）³兄弟である」

¹ 景行天皇…第12代天皇。和名で大足彦忍代別天皇（おおたらしひこおしろわけのすめらみこと）。

² 朕…天皇や皇帝が自分のことを指している言葉。

³ 熊襲建…景行天皇の時代、九州南部に勢力の在った豪族。

「え、熊襲建ですか」

小碓命が驚くのも無理はありません。

もともと、朝廷は初代神武天皇が九州の高千穂から東征軍を率いて大和の国を平定してできたものです。よって現在の朝廷は、九州が元々の地盤なので関係は深いはずでした。しかし、何代もつづくなかで、九州の中に「自分たちこそ、本来の大和朝廷の直臣である」というような思いが強くなり、飛鳥の都の役人との間に意識の違いができるようになってしまったのです。景行天皇は、そのことを問いただすために、熊襲建を呼び出しましたが、熊襲建は上京しませんでした。そこで景行天皇は軍を率いて熊襲建征伐（せいばつ）に来たのです。

しかし、熊襲建の軍は強かったのです。もともと、九州の土地を知り尽くしており、地盤を生かした戦いをしただけでなく、兵の一人一人が精強でとてもかなわなかったのです。

そこで、景行天皇は誰かに暗殺させることを考えました。しかし、今率いている軍の者は、何回も戦っている間に顔を知られてしまっています。そこで、強く、そして自分が最も信頼できる自分の息子の小碓命を呼んだのです。

「数万の軍勢でも倒せない熊襲建を私に倒せとおっしゃられるのですか」

「そうだ。それも小碓、軍はなし、小碓一人で行って倒してまいれ」

「そんな、それは無理というものでございます」

「いや、私のところに来た情報では、熊襲建は現在、自分の屋敷を新築中で、その屋敷が来月出来上がるそうだ」

「陛下。陛下がそこまでご存知とは知らず失礼いたしました。その屋敷の新築祝いの宴に入り込み、熊襲建を斃（たお）してきたらよいのですね」

小碓命は、景行天皇が見込んだだけあって、非常に頭が良く、また行動力がありました。小碓命は、すぐに母のところに行き女性用の小袖を借りました。まだ十六歳であり農作業などをしない小碓命は、肌も白く身体もそんなに大きくはなかったため、大人の女性の小袖を着ていけば、女性に見られます。そうすれば、武士や他の男と違って熊襲建に近づくことも簡単に

なると思ったのです。

小碓命は、宴会の中にうまく入り込みました。新築祝いだけあって、酒も料理も素晴らしいものばかりです。小碓命は、いつも見ている宮廷内の女中のように、酒や料理を運んだり、お酌をしたりというように振る舞って、新築の祝いの席で普通に働きました。

「その女中、あまり見かけない顔であるな。わざわざこの熊襲様のお祝いに駆けつけたのか」

熊襲建は、朝から続く酒宴の席での酒と料理で顔どころか身体中真っ赤になり、かなり酔っているのか、近くの柱に寄りかかって身体もだるそうでした。

「はい、私ですか」

「そうじゃ、こっちに来てこの熊襲様に酒の酌をせよ」

小碓命は、近くのお酒の器を手にとると、熊襲の近くに行きました。そして、熊襲建が利き手の右手で器を差し出した瞬間、小碓命は懐にしまった懐剣を熊襲建の腹に突き刺しました。

「お…お前は」

「景行天皇の息子、小碓命である。お命頂戴する」

慌てたのは、熊襲建の弟です。兄である熊襲建が殺されたことを見て、とるものもとりあえず、すぐに逃げだしました。しかし、弟も朝からの酒宴で酔ってしまって速く走れませんでした。

小碓命は、すぐに追いつくと、熊襲建を刺した懐剣を一気に背中に突き立てました。

「我々が最も強いと思っていたが、東の国にはもっと強い者がいた。我々は熊襲で最も強い建と名乗っていたが、あなたは倭の国で最も強い『ヤマトタケル』とこれから名乗ってください」

熊襲の弟はそう言うと、そのまま息絶えてしまいました。

こうやって小碓命は、これ以来「日本武尊（やまとたけるのみこと）」と名乗るようになったのです。そして「たった一人で強い熊襲兄弟を誅（ちゅう）した」ということで、その武勇は

日本で有名になったのです。

しかし、その有名になったことで最も困ったのが、父である景行天皇でした。景行天皇は、すでに皇太子を別な人に決めていました。また長男が跡を継いだ方が、争いもなくなります。しかし、日本武尊が強く有名になると「日本武尊を天皇にすべき」というような声が、朝廷の中で上がってきてしまいます。そこで景行天皇は、人気があり強い日本武尊を都から遠ざけるようにしたのです。

「小碓よ」

「はい、お呼びでございましょうか、陛下」

「熊襲を斃したのはお手柄であった。朕がほめてつかわす」

「ありがとうございます」

「ところで、熊襲を斃しても、まだ私の命令に服さない、荒ぶる神々がいるので困っておる。

今度はそれを斃してきてほしい。東国十二か国のすべてを平定してまいれ」

「陛下、熊襲の時のように何か情報がおありでしょうか」

「朕であっても、十二か国分の情報をすべて持っているわけではない。今回は小碓、いや、今や日本武尊というのであったか。そなたが情報収集からすべてをやってまいれ」

「ああ、何という。陛下は、私にそのようなことができるとお思いでしょうか」

「そなたの兄の大碓（おおす）⁴に任せたら逃げてしまった。兄弟で助け合うのは本分であろう。よろしく頼む」

景行天皇は、そう言うと日本武尊の反論も聞かずに奥の間に下がってしまいました。

日本武尊は、これで最後になるかと思い、伊勢神宮にいる母の下に行きました。母は大変心配していましたが、天皇の命令であれば従わないわけにはいきません。「何もしてあげられないけれども、これを持ってゆきなさい」伊勢神宮に伝わる草那芸剣（くさなぎのつるぎ）と小さ

⁴大碓…大碓命。日本武尊の兄。古事記では景行天皇に逆らって日本武尊に殺されてしまうが、日本書紀では景行天皇に東国征伐を命じられるも、怖くなって逃げ出してしまう。

な袋を一つ手渡しました。

「何かあればこれを開けてみなさい。きっと役に立つから。」

日本武尊は、それをもって東国に行きました。

東国に来たら、そこは敵ばかりです。さすがの日本武尊も、なかなかうまくいきません。それでも、三河国・遠江国と平定して先に進みました。

ある日、「荒ぶる神がいる」と言われてそちらの方向に進むと、一面ススキが茂っています。

「いまだ」

敵はその時に日本武尊を囲むように火をつけたのです。

「どうしよう」

その時に日本武尊の頭の中に、伊勢であった母の顔が思い浮かびました。困った時にあけてみるとした袋の中には火打石が入っていたのです。

「よし」

日本武尊は、草那芸剣で近くのススキを切り、そして火打石で迎え火をつけて敵を逆に焼き尽くしました。このことから、静岡県には、今でも「焼津」という地名が残っています。

草那芸剣と火打石で、順調に平定を進めた日本武尊でしたが、戻ってきて美濃国伊吹山に、最後の荒ぶる神がいるといわれて、それを平定に行こうとしました。しかし、その時、草那芸剣が急に熱を帯びて全く剣を持つことができなくなりました。

「草那芸剣などなくても、素手で伊吹の神を平定してこよう」

日本武尊は、そう言う素手で伊吹山に登りました。しかし、伊吹山の神は大氷雨を降らせ、日本武尊を失神させ追い返してしまいます。居醒の清水（いさめのしみず）⁵などを使って何とか山を下りますが病気になってしまいました。

「何とか国に帰りたい」

病の身体でありながら、日本武尊は何とか大和の国を目指します。しかし、どんなに強い日

⁵居醒の清水…滋賀県米原町醒井（さめがい）の加茂神社に出る湧き水のこと。

本武尊も神の障りで起きた病気には勝てず、とうとう、伊勢の国能煩野（のぼの・三重県亀山市）で亡くなってしまうのです。

尾張に ただに向へる 尾津の崎なる 一つ松 あせを 一つ松 人にありせば

太刀はけましを きぬ着せましを 一つ松 あせを

<ミヤズヒメのいる尾張の国に向いてる尾津岬の一本松よ。なあ、一本松よ。

お前が人間だったら、この刀をつけてやれるのに。

この着物を着せてやれるのに、なあ、一本松よ。>

大和は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる ヤマトしうるはし

<大和は、日本の中でもっともすばらしいところだ。

長く続く垣根のような青い山々に囲まれた大和は、本当に美しい。>

命の またけむ人は たたみこも 平群（へぐり）の山の 熊白櫛（くまかし）が葉を
髻華（うず）⁶に挿せ その子

<命の無事な者は、幾重にも連なる平群山（=奈良県生駒郡平群村）の

大きな櫛の木の葉をかんざしとして挿すがよい。>

嬢子（おとめ）の 床のべに わが置きし 剣の太刀 その太刀はや

<私がミヤズヒメの寝床に置いてきた、草薙の剣。

ああ、あの太刀はどうしただろうか。>

この四つの歌を詠んで亡くなった後、日本武尊は、白鳥になって海に飛んでいったと伝わっています。

⁶ 髻華…かんざし。当時は髪飾りではなく、頭を守る魔よけとして使われていた。